

町指定文化財(史跡)

「黒澤止幾生家」

指定年月日/平成二八年三月一日
所在地/城里町錫高野 管理・所有者/城里町



▲撮影：平成25年1月

「黒澤止幾生家」は、幕末勤王の女傑、さらには我が国最初の小学校女性教師の一人ともいわれる黒澤止幾が生まれ育ち、活動の拠点とした場所です。生家の構造形式は、茅葺の曲屋寄棟造で、延床面積は約一〇八平方メートルです。西側の上手に八畳間、下手に十畳間を設け、その南と西には縁を巡らせて南縁の東端を玄関としています。東側は生活の場で、板敷間と土間になっています。

生家は、止幾が誕生した文化三(一八〇六)年以前の建築物であり、古民家としても貴重なものと評されています。

黒澤家は、代々宝寿院という修験道場で、寺子屋も兼ねていました。止幾はそのような環境下で成長し、地方の文化人との交流の中で自らの思想を形成していきます。

安政元(一八五四)年以降は五代目の寺子屋師匠として近隣の子弟の教育にあたりました。その後、単身京に上り徳川齊昭の雪冤に働いたことから中追放となりますが、帰郷後に寺子屋を再開しました。

明治五(一八七二)年に学制が公布されると、自宅を錫高野地区の小学校として代用することを受け入れ、自身も六八歳で小学校教師となりました。

幕末の政治・教育・女性史上に大きな足跡を残した人物として、黒澤止幾への関心が近年頓に高まっています。史跡「黒澤止幾生家」も、今後さらに注目されていくことでしょう。

解説文/町文化財保護審議会会長 小山映一
問合せ 教育委員会事務局
☎029-288-3135

俳句

両足をのせ湯たんばに未練あり 飯田 勇一
棟上げの終へて青葉のみづみづし 鯉淵 寿美恵
薫風やサクラてふ名の子馬あて 今瀬 多代美
一本の藤より藤の花天井 中野 千賀子
川添ひや木々のかんざし藤の花 飯村 昭子
棚田道日本たんば日を集め 綿引 英子

文芸しろさと

短歌

貧しくも穏やかなりしふる里の 香き日を思へり「昭和の日」今日 渡辺 千紗子
逝きし夫残されし吾それぞ 枝 不美
れに朝を迎ふる寂寥の中 大森 久子
呆けずして米寿を生きる証と 青柳 京子
し般若心経今日も唱える 坪井 きよ子
パンジーの冬の彩り守りつ つピンク、白、紫の美し 所 美恵子

鯉のぼり雨上がりの空真青なり 仲田 まちゑ
妙義山はるか夏雲浮いてをり 森 静江

男物ばかり干されて藤の花 竹内 幸子
サングラス洗濯物を干す私 瀬谷 博子
産土の神社境内八重桜花 岩下 金司
雨脚の大きに春の過ぎゆくも 田口 勝元
店じまい軒につばめの空巣かな 寺門 孝子

川柳

今でしよう免許返納子等初め 富田 多蔵
心ない嘘も方便のせ上手 車田 綾子
今日もまた予定はないが忙しい 飯村 孝一
顔と名の知らぬ還暦同期会 川原 清
角界も世代交代受けまくる 栗林 一郎

「短歌は生きた証なり」とふありのまま詠みし言の葉に人生残さむ 山形 式妙
人間ほどに罪なる者は外になし肉類喰べて美味とほめて 杉山 みちこ
筑波嶺に笠雲かかり予報士は明日の天気の降雨を告ぐる 枝 不美
夕ぐれて風なき庭に咲き満つるつつじの群に亡き父母しのぶ 島 愛子
仲よしの友が逝きたり悲しかり十日前には会話したのに 坪井 きよ子
求め来たる花瓶に庭の花々を愛でつつ活ける至福の時間 萩谷 登喜子



手の平に余る牡丹を愛しみて誰に見せむか五月の庭に 富田 佐智子
お母さんお母さんよと子等が呼ぶ思い出遠く母は老いる 藺部 光子
綺麗すぎ風に揺られて頭振りこの幸福を肌感じつ 富田 欽子